

新 聞 彙 實

第

四

號



西垣文庫 

文庫 10

7306

4

80

75

70

65

緒言

凡天下ノ事情ヨク相通シ未タ見聞セザル事ヲ
 モヨク知ルハ新聞紙ニ如クハナシ依テ今大政
 公布ノ人民普ク熟知セサル可カラサル條ヲ始
 メ都鄙ノ新報勸懲ノ一助トモ成ヘキノ奇事ヲ
 併セ各社新聞ヲ参考シ其讀難キ文字ハ更ニ假
 名ヲ施シ挿画ヲ加稗史ノ躰ニ摸シ新聞ニ志有
 ノ婦女子ヲシテ共ニ知識ヲ開カシメンコトヲ
 欲スル已

浄書 平田登

官許明治八年五月十七日

官新聞事實

第四号

明治八年
八月一日

西垣文庫

編輯 松木平吉
 補正 吉田庸徳

新聞

○静岡縣士族鈴木某と云人の同縣下駿州沼津在椎路村と
 云ふ所小住居をきりて人々が暇年中より東京より巡查
 と勤め居らるゝが其細君のおのふと云ふい年も二十歳
 ほど過ぎ満らぬ花も盛り十九歳姿容貌も美しく其行ひ
 も正しく女子の手業ハ云ふもさう和歌の道をも嗜み
 いと神妙な性質夫の留守と打ちまもり起ましく見づ寐も
 蚊帳の一人寐の淋しき夜もいとひやく舅姑と大切ハ
 東京の夫の身と無事息災と心小祈り近所の人も評判のよ



き嫁さま この噂なり 或る日おのぶの叔母が来り 其方の留守を淋しいとも思ふ 心の中々お家を守り 舅姑も孝行のこる方もなく 朝夕夕夕の

炊ぎより 終日稼ぎ 樂しきと思ふ 鈴木は東京で外よ女を貰ひ 一とくちを捨てる置るるや ぞうくした

あつちろろろと云はるるおのぶのぶハママ叔母さん 御戲言をおツいやい

まを 仮令へともが 信実ぶも 御留守とすもり 兩親へ孝行のたをが ことたり

役すの東京でいんふ女を御貫ひに成とも 只御役まく大切よ 御勤めをさるが 何より重畳

男一人りハ何ぞともさる御不自由と明け 暮小そきの

思ふく居すさる 御側又女が居る

わつちバ万夏の御世話も 届きませう 夫が私ハ嬉しく

怨と妬むのあつちろろろ 貞節外小顯ハ

ろろ 正しき 挨拶はあつちと 返辭もあつち 蟬の声も涼しく

新聞



胸の中
のさ
まが
の
叔母

感心と
其ち、我家へかえりてがおのぶい
跡ふ只一人女ご、後のついで氣ふかりり

東路より月照るやとよとよとよと
啼ありとよとよとよと

山時鳥



と一首を詠く夫の元へ送り
云ひすまが若き女ありと
感心く世間の嫁さん
達も此女のやうふ有りたき
とのく御座ぬまき

○扱世の中小騙賊と云ふ
一種の泥つくぢあり
まらば是の此度珍ら
き騙りの次第は加賀國
濃見郡湯谷村の南部與兵衛といふものハ今年
二十八才ぢがが好く大坂府下小寄留く第四大匠



四の小區新保町一丁目中村作右衛門の娘おみちとく年の
三五の夜月の八日薬師の縁日

う何より知りぬ
ども御堂参りの下
向の道とチット
見添一其

日より
何の因
果が意風が
身の毛たわふと吹き
立ち如何のせんと胸の火の
燃一たのよりお思へども言



ひより手段もあらずとて吃度心小思案一見知らぬこ
と幸ひと作右衛門の家小性さまと其方の娘おみちと
の筋ある故直様親子同道一當裁判所と出るやうかと
権柄づく小云ひと多親子の顔を見合せと思ひよりと
こあつて是非もたたく使の者と同道一大江橋と来り
日も稍々西山小没らんと

せり時
彼の男の云
ふ小今日ハ
余り遅刻由
へ又明日来と云ひ



渡さともく其日あけ空一宿へ歸り一其翌日も彼の者

サア、来りて打連る裁判所の近所
至り爰に暫く扣へよと親子両
人を残し置き其身ハ即ち裁
判所へ往くあり小見せ道
を換へ何もて往り程
経る後再び来りて今
日ハ又訴訟の數が多
今や、迎ひ今日の裁
判所の相成兼る事なるは
又々明朝出頭せよ併し娘ハ
裁判の本入をよば今晚ハ當所へ留置く法あり、拙者慥に
預るなり必らむ心配ありと顔色和らげ察切らる云



ム、作古工門も安心し何卒と御慈悲を願ひ
おはと厚く禮し帰りにさく彼の男ハ
娘と連き彼地此地と引廻し此所を屈竟
りき場所と或る明き店へ誘ひ込め其
裁判ハ外を長く長刀チヨン
まじり色よしとすよ今宵一度ハ
忍び寐と思ひく心の丈
と言ふも語らも心せぬ
只此更と是非聞かアイと
返辞としをらまて云ひつ暴
手込の仕業娘も今ハ一生懸命声と限り小泣叫び
押へらまたる腕もぎとふ透間見合せ刻糸起す



顔も紅葉も紅ひの襟かき合を隙もきく乱き一髪も其尻小
 息せれ切く駈出—我家へ戻り逐一小あり—
 次第と物語も作右工門もびづり—呆ま
 果たる彼奴の仕業も此上ハ是非も—
 與兵衛の在家と探索せんと日々彼地
 此地徘徊せ—天網遂も逃るべき
 とうとう作右工門も捕まき忽ち
 已まが裁判所の詮議とらる身と
 かりぬ又娘も流行の
 賣淫印—やとく是も
 裁判所へ送らる事—た



○此頃中仙道より
 来—人の知らせよ
 或る一客が東京より
 急ぎの用あり中仙道
 と下り—小通りか—の
 板橋驛其棒真より
 中仙道大宮驛への
 人力車(名)と住呀
 を知らさきと慥々
 記号ハ四大區印25二十五番とあり申した
 壹分貳朱の賃錢よく約束したまは車夫少々支度と立戻り
 一小暫しが程ハ待たう—が余り支度の遅まゆなつ—一足



二足と緩々出らけ
歩あゆみ小道せうだう法ほう凡ぼん
と十町余来より又待まち
てども車夫くるまぶいすど
跡あとより見みへざまは
元もとより急いそぐ旅たびの跡あと
見みううろろててふふ歩あゆみみが板橋いたばし
驛えきより二十町余も距あッッわわ
志村坂しむらざかの跡あとより以い前ぜんの車夫くるまぶ
ヲをイいクく且かつ那な往むかひませせうう
御待ごまちああままと声こゑううけけらら
ままと客きやくハ直ちよく小足せうそくをを



留とどめ大おほき遅おそいトとややなな
いいろろ一ひと時じ間かんの余あまも待まち居ゐるる巴おもも急いそぐぐかかつつの爰こゝまで
来き元もと壹いち分ぶん貳に朱しゆを約やく束そくししたたゆゆとともも丈ぢやうケけ遣やるるかか其そのかか
り少すく急いそいでいでらんらんか車夫くるまぶナナアアニニ五ご六ろく里りも
いいろろ道みちを一分二朱位いちぶんにしゆゐハ急いそげげせせんん
遅おそくくててよよろろままにに往むかひませせうう
まませせうう客きやく夫ぶ
かからら其その方かたハ
無む理りとと云いふふ
のの人ひとををさん
ざ待まちせせとと上あ又また
板橋いッッ爰こゝまでまで





新編 浮世草子

小一里も有て見よが約束した借料
 夫を皆外遣るかと思ふに
 とのへば車夫大イホ怒り
 事だべら棒の
 約束ハしたガ
 急ぐ約束の志ネ
 今ホ成る錢
 惜くするのた
 錢がはしり
 はしりヤ



小一里も有て見よが約束した借料
 夫を皆外遣るかと思ふに
 とのへば車夫大イホ怒り
 事だべら棒の
 約束ハしたガ
 急ぐ約束の志ネ
 今ホ成る錢
 惜くするのた
 錢がはしり
 はしりヤ